

私のなかのベトナム戦争

小中陽太郎

へ平連に賭けた

青春と群像

私のなかのベトナム戦争

ベ平連に賭けた青春と群像

小中陽太郎

サンケイ新聞社

私のなかのベトナム戦争

ベ平連に賭けた青春と群像

小中陽太郎

昭和48年10月31日 1刷

定価六〇〇円

発行者 小野田政

編集者 塩田廣八

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・千代田区神田錦町三の

一五梅屋ビル(101)

大阪・北区梅田町二七(530)

乱丁・落丁本はおとりかえします

© 小中陽太郎 1973 Printed in Japan

〈校印省略〉

0095-073833-2756

目次

プロローグ

たたかいの序曲としての和平協定 7

I 1965年春～1967年夏

- 1 ベ平連誕生記 14
- 2 8・15徹夜ティーチ・イン 21
- 3 米大新聞への「反戦広告」 28

II 1967年秋～1968年夏

- 1 イントレピッドの四人の脱走兵 36
- 2 臨時革命政府兵士 46
- 3 インドシナ三国へ 52
- 4 勇気と日常が同居する首都ハノイ 61
- 5 「竜宮城と水牛の国」の歴史の爪痕 65

Ⅲ 1968年秋～1969年冬

- 1 《変革か反戦か》「京都・日米市民会議」 73
- 2 10・21新宿闘争とタマゴ爆弾 81
- 3 市民の権利と4・28沖縄デー 85
- 4 「大学べ平連」血風録 92
- 5 日大闘争の「支柱」秋田明大 99
- 6 フォークゲリラの思想 104

Ⅳ 1969年春～1969年夏

- 1 《6・15デモ》吉川勇一氏の逮捕 112
- 2 「六月行動」の軌跡 117
- 3 「軽薄な綱渡り」 121
- 4 デモ行進の思想 127
- 5 ビン夫人とシャリー嬢と 133

V 1969年夏～1970年夏

- 1 大阪ハンパク夏の陣 142
- 2 鶴見俊輔、小田実深夜の対決 148

- 3 『週刊アンボ』の発刊 153
- 4 テンノー論争と毎日デモ 157

VI 1970年秋～1972年冬

- 1 “一株運動”と防衛産業の裏面 165
- 2 連合赤軍事件と「ほびと」 174

VII 1971年春～1973年春

- 1 内部で爆発した「冷え物論争」 182
- 2 平連原理の危機 192
- 3 深夜の怪電話と「モデル小説」 195
- 4 政治犯釈放と戦災孤児救援 200

VIII 1973年夏

- 1 八年間の我がたがたかい 206
- 2 ベトナムからアジアへ―― 213

エピローグ

終りなきたたかいのはじまるとき

私のなかのベトナム戦争

ベ平連に賭けた青春と群像

プロローグ

たたかいの序曲としての和平協定

七三年一月二十七日夜である。

宇宙中継のテレビ画面に、クレベール通りの国際会議場が映る。建物よりも、その前の舗道に陣どった群衆の手にする赤地に星のあるベトナム民主共和国（北ベトナム）の旗や、赤と青に星のある南ベトナム臨時革命政府の旗が目に見える。在仏のベトナムの人々だと、リポーターがいう。パリの「ベトナム人連合」でよく話し合った、控え目で、遠慮深いベトナムの人々が、こんなに表立って旗を振るとは思わなかった。それだけ彼らが、ハノイや臨時革命政府に寄せる期待と歓びの大きいことがわかる。

三年前、クレベール通りは通行人もまばらで、マロニエの花の束がビルの壁にそって揺れるばかりだった。

会議場に連れて行ってくれたのは、シャリーだった。彼女とは、ストックホルムのベトナム会議で知りあった。美しい黒い髪と理知的な輪郭をもっている、アメリカ・インディアン・スー族出身の大学院生だった。私たちは、ストックホルムで、ビン女史やスアン・トイ氏との集会の末席に列なつたのち、彼女と、ベルリン、フランクフルト、パリと南下して来た。途上、ドイツのSDS（社会主義学生同盟）やフランスの反戦組織、あるいは国際軍縮平和連合の人々にあった。

それから会議場のぞいてみた。フランスの警官が守る戸口の少し先から二人でもぐりこんだ。中に、ウィリアム・バーチェット記者や、ベトナム通信（ハノイ）の支局長がいた。日本人記者たちも、当時は、華々しい解説よりも、ここでじっと発表文のこまかなニュアンスを検討する忍耐強い仕事を続けていた。進展のない記者会見のあと、ロビーでウイスキーを飲んだ。本会議はなかったが、会見にあらわれた次席代表たちは、アメリカはぶっきらぼうに、南政府は居丈高、ベトナム民主共和国は冷静で、解放戦線は熱っぽかったように思えた。

三年後のいま、画面を見ながら、シャリーを思い出す。縁は異なもので彼女の夫君はいま肢体不自由児治療の教授として東京郊外で教鞭をとっている。昨夜わが家で会食した。シャリーはアメリカでインディアン文

化のためにたたかっているのである。

クレベールということばには、もう一つ、個人的な思
い出がある。フランスから電報をうつとき、コナカのK
の電報用語は「クレベールのK」という。「K Comme
KLEBER」といって何度電報をうったことだろう。

ビン女史やスアン・トイ氏は、去年（七二年春）もパ
リのベトナム集会で演説を聞いた。その人たちが到着を
はじめる。街頭のベトナム人たちの拍子をとった高い喚
声が聞える。この爆発するような声に、彼らの勝利感を
深く思う。

赤いジュウタンが敷き詰められている。

その上を代表が歩いて行く。それを見ながら、ハノイ
で五年前に聞いたことばを思い起した。

「私たちは、アメリカを叩き潰して追い落とすといってい
るのではない。ちゃんと面子はたてる。赤いジュウタン
を敷いてほしい、といえば、ジュウタンを敷きましょ
う」と。

同じことを六九年にパリで、ハノイのスポーツスマン
といえるベトナム通信の支局長の口からも聞いた。今度
の協定で、北側はアメリカに譲りすぎたようにいう人が
いる。そしてそれを北側の軍事的限界や、北爆の痛手の
ように説く。

しかし支局長が、こう語ったのは、北が軍事的にも優

位にたつた、まさにあのテト攻勢の直後であったことに
注目したい。

「ジュウタンを敷いて出て行ってもらう、決して平手打
ちで出さない」

これは、一貫して北の方策だった。あれだけ非道な絶
滅爆撃を受けてさえ、なお、敵に絶滅を要求せず、今度
の方針をとった粘りと自信に舌をまく。

しかし、そうはいっても、ベトナム民主共和国も臨時
革命政府も、爆発する欲びというより、押えたきびしい
思いを抱いているのではあるまいか。

南北統一という故ホー・チ・ミン大統領のかかげた目
標をこれからのたたかいにゆだねねばならなかった、と
いう痛切な思いだ。彼らの旗が、カマウ岬にまで到達す
る一歩前で、彼らは米中ソの三極構造の中で、今後を政
治闘争に変えねばならなかった。その思いは、決して単
純な満足感ではないだろう。

明日の停戦を目前にして臨時革命政府は、サイゴン北
西九〇キロのタイニンに進んでいるともニュースは伝え
ている。

臨時革命政府に「タイニンの勝利」という有名なド
キュメント映画がある。激しい砲火の中を、解放戦線旗
は進み、省都タイニンを奪取する。そのため地下の司令
部で実に緻密な作戦をたてる。その有様は、まことにサ

スペインスにとむ。そして解放後、踊って喜ぶ村人たち。そこから臨時革命政府は、タイニンを首都として発表するつもりではないかというニュースも流れている。そうだろうか。テトの頃、ユエに政府をたてるか、と問うたことがある。彼らは、ゆっくり笑って首を横にふった。

サイゴンへ！とそのほほえみは語っていた。

私たちは、よくこう言い合う。

「私たちの反戦運動は、ベトナムの平和を願うものであったけれど、実は、ベトナム人民のたたかいに逆に支援されていた」と。

私たちは、いま、ベトナム人民の勝利にまずお祝いと感謝のことはを送らなければならない。

私たちが曲がりなりにも、戦争の仕組と、私たち日本の加担に気づいたのは、彼らのたたかいのゆえであった。鶴見良行氏は「私たちはその自省を、かぎりなくベトナム人民の生命の犠牲に負うている」(七三年一月二十五日・毎日新聞)と記しているが、そのことはまず認めなければならない。個人的にふりかえっても、ベトナムの人々の他に世界や日本の様々の人に手をとって引いていってもらっていると感じる。

そして私たちにとって最大の問題は日本の加担の事実である。そのことはベトナムを考える上で、つねに見つ

めなおして行こうと思う。

ニクソン大統領が、仮調印を発表した二十四日正午、小田実氏の父上の御葬儀で、吉川勇一氏らとともに、大阪の郊外にいた。雨の寺に、ぬかるみを踏んで、新聞社の人々が押し寄せて来てニュースを知った。

カーラジオから洩れる途切れ途切れの演説を聞いていて、和平調印というのに、激しいいきどおりとやりきれなさを感じた。ニクソン大統領を頂点とするアメリカの支配層は、いったい、自分たちの国の弾薬が四千万の人口のうち六百万人のベトナム人民を殺したり、傷つけ、五百万人の家と土地を奪い、難民とし、全土の緑を絶滅したことに何の反省も心の痛みも感じないのであろうか。

ベトナム戦争で実験された世界最新のアメリカ科学技術は、ひたすら、無抵抗な地上の民衆一人一人を、肉体的に痛めつけ、絶望させ、苦しみの中に、殺しつくすだけのものではなかったか。

地上で多数の破片にかわるバイナッブル爆弾を私は見た。パチンコ玉のように、肉体に深く喰い入る弾丸をもったボール爆弾は、やがて、無数の子爆弾をもつ親子爆弾にとってかわられた。

さらには、強い風圧で、被害者の外見はそのままだに内臓を破裂させる風圧爆弾は、地上の人間を、風船のよう

にばたばたと殺してしまふ。地下の防空壕に逃げこんでもムダである。矢じり爆弾や貫通爆弾が地中深く突きささってくる。

ナバーム、遅発爆弾、それから、山あいの橋や建物を蛇のように執拗に追いつけるスマート爆弾は日本製のテレビによって成り立っている。

アメリカが投下した砲爆弾の量を今、アメリカ側の数字によつて見てもこうなる。六四年來、米軍砲爆撃千二百萬トン。広島型原爆五百九十個分。爆弾だけとつても七百萬トン。これは第二次大戦の三倍、朝鮮戦争の六倍、日本空襲の実に四十倍である。(一月二十八日・読売新聞)

そして全土に降つた枯葉剤は、單に葉を枯らすだけでなく生態系を絶滅しようというものである。またCSガスは、日本で使われる催涙ガスの何十倍という強さを持ち、すでに毒ガスである。それから北ベトナムへは洪水を引きおこす堤防破壊が続いた。

しかも、この背後には、大江健三郎氏が鋭くついているように「核戦略下の核威嚇」(一月二十六日・朝日新聞)が黒い死のつばさを拡げている。

実際、私たちはケサン攻防戦、あるいは去年の春の北側の総攻撃に際して、アメリカ軍は核兵器の使用を準備したという情報を岩国基地や沖繩から得たのであった。

私たちは、真剣に、抗議のための手だてを考えた。「核爆弾が炸裂してからではもはや間に合わぬ、すぐ行動を」という提案がなされ、私たちはその方策の前に頭をたれた。七二年の四月、解放戦線のバリ代表部情報局長ファン・パン・バ氏にあったときもこの問題について語り合った。氏は、しかし、こう答えた。

「いま、南爆は、すでに核兵器と同等の火量に達している。この上、私たちは、そのかげにおびえることはない」

まことに、アメリカの戦略は、どう見ても、アジアの一つの国土と民族を、この地上から絶滅しようとした、としか考えられぬ。

彼らが白色人種に対しても、このような破壊をしたか、同じ文化をもつ民族に対してもこのようにしたか、と考えると、單に共産主義への脅威という以上に、文化の思い上り、自らを全能とする悪魔を思わぬわけにはいかない。

これだけの殺戮をほしいままにしておいて、「名誉ある平和」と平然とうそぶく大国の論理はすでに人間の理解を越えている。私は「二百五十万のアメリカの若者」に触れ、「捕虜釈放」を誇らしげに告げつつ、ついにただの一言も、死んだ、いや殺されたベトナム人について触れることのないこの演説を、世界史の停戦宣言の中で

も、もつとも非人間的なものだと思えないわけにはいかなかった。

それなのに、この演説の尻馬に乗るように、新聞やテレビで「やっとめぐり来た和平」とはやしたてるのは腹立たしい。

死者は^{よみがえ}甦るすべもなく、これからまだどれだけ多くの人の血が流れるかもわからぬこのときに。いまは心を許さず停戦の実態を見極めるべきである。

しかし和平協定を現状保存、と見る見方には承服できない。

最大の点は、密林の中のゲリラが、臨時革命政府として堂々と登場してくるということだろう。それだけに、かつてニクソン大統領が「南ベトナムの唯一の政府はチュウ政権」と騒ぎたてる、ということになるのだろう。

臨時革命政府が六九年に行なった八項目提案は、チュウ大統領以下を排除して臨時革命政府、南政府、第三勢力による三派臨時革命政府を樹立せよ、というものであった。いま、かれらは、チュウ排除の要求をおろしたが、それだけ政治闘争はきびしくなるのだろう。第三勢力というものは、実際問題として解放戦線と極めて近いとしても、チュウの弾圧下では、きびしい状況に立たされるだろう。

しかも問題は、テーブルで決まるのではない。ベトナム

ム全土の地道な政治活動で決まってくる。

そうなると、二十万人という南ベトナムの政治犯を今後の交渉に任せる取り決めは臨時革命政府側にとって残念なことであったことだろう。それでもなおかつ臨時革命政府は^{くさ}根となって登場してくる。

五四年のジュネーブ協定でハノイは軍を引き揚げ、そのとき、アメリカは突如、協定調印を拒んだ。

今度は調印後も、現実には武装した政治闘争となるのだろう。内乱、というようにいう人もいる。どちらかの力が弱まれば、そこには現実の戦火もあるだろう。

何が平和であろうか。

アメリカは、日本の相模原から、岩国から、沖繩から、チュウ政権に、駆けこみ補給を行なった。それに協力して、日本政府は、車輛制限令さえ改めた。岩国、沖繩、タイ、フィリピン、グアム、横須賀、クラーク基地などの空軍も第七艦隊もそのままである。

さらには、多くの軍事顧問団を民間人としてサイゴンに残すだろう。コンゴのように外国人雇兵が、操縦桿を握り、風圧爆弾やボール爆弾を、南ベトナムの上に振りまくかもしれぬ。

内政面では、南政府軍は高額な給料を支払い、様々な恩恵を与え、西ベルリンでしたように、サイゴンを歓楽のちまたに変えて、南軍兵士を引き締め、利潤を与える

だろう。

人間の恐怖と欲望の上に作られた統治と、民族の理想、平和、自然、親子、土、といった思想がたたかう。

その時勝敗はどうなるか。もはや米軍の指揮がなくても南政府の兵士は、銃をもって自分たちの村々に発砲するだろうか。彼らを兵にしばらくつけておくのは、金か銃殺の恐怖のみだ。彼らは銃を棄て、故郷に帰るだろう。その時、アメリカは、また絶滅爆撃をしようというのだろうか。

ニクソン大統領と、それからそれに従った多くの国、わけても日本は、ベトナム戦争で思想において敗れた、と認めざるをえない。

大国が力で、小国の生存の願いを押えこもうとして、日本の四国全体の広さを越える土地の葉を枯らし、千四百億ドルの金をもって殺戮し尽しても、民族の自決という願いを根絶やしにすることはできない。

それはまた、どんなに工業化しようかと先進工業国は、そのことだけで、土と木と農耕の小国を絶滅できないということである。

ゲリラ戦争、人民戦争、自然との合一、そういう別種の文化が、コンピューターと火薬の思想に勝った、ということがある。

南ベトナム内部のあらそいは、もとより一層激化しよ

う。しかし、ともかくアメリカは出て行かねばならなかった。アメリカの国民は、道義的に思想的に疲れ果て、経済的にインフレの前に立たされ、ここから出て行くことと決めた。

それゆえ、この撤退は、単なる撤兵以上の意味をもっているはずだ。

アメリカの支配層が、よってもって立つ原理、権力と資本と利潤が世界を決める、という思想そのものが問われた。それは本国においてさえ敗れたのである。カムラン湾から引き揚げてさえおけば、それでよし、というものではない。しかし、ニクソン大統領は、いまだに、カムラン湾からカーキ色の兵さえ引き揚げておけば、あとは、今まで通りやっていける。いや資本と武力でいっそううまくやっていると考えている。そこが、怖ろしい。

問題は、南ベトナム内部でチュウ政権と、臨時革命政府が、のち争うであろう、ということではない。撤退する米軍にかわって侵攻する米経済とそのあとに続く日本。アメリカも日本も、自分たちが敗れた、と思っていない、そこが問題だ。

そして私たちは、当面の目標を失い、平和でもない、戦争でもない状態の中で、ぶすぶすとした不満の中に生きるだろう。

しかし、ベトナム戦争で問われたのは、ベトナムで象徴される近代工業国家のあり方そのものだった。

それは「戦争と平和」でトルストイが描いたような農民と征服者のたたかいであった。ところがニクソンときたら、征服者の敗北を描いたチャイコフスキーの「序曲一八一二」を就任式で演奏させる、という無神経さである。彼がモスクワで述べたターニャの例といい、自分の敗北が権力者には見えぬ、とみえる。

しかし、兵士の中には、ベトナム側に立とうとするものがあらわれ、それはついにはB52のバイロットの中にまで出たのである。彼は、はっきりと、自分は撃墜がこわいからでなく、この殺人に反対なのだ、といったのだ。
(一月十二日・サンケイ新聞)

ベトナム戦争によって芽生えたものは、学生運動、人種差別に対する鋭い怒り、公民権運動、日本でも新しい型の反戦運動、反公害運動などの文化である。

シオドロ・ローザックというアメリカの若い学者は、ヒッピーやコミュニンの若者の新しい文化について論じた『対抗文化の思想』の中で、ローマ帝国の秩序に対抗した乞食とも見える一群が、キリストという聞いたことのない神を信じてローマを倒した例を引いている。

キッシンジャーが走りまわり、ロジャーズがサインした調停は、新しい文化に、古い帝国の文化が最初の一步

をゆずった証^{あかし}なのであろう。

I 1965年春～1967年夏

1 ベ平連誕生記

よく、どういうきっかけでベ平連運動に加わったのか、ときかれる。そう問われると本当に困る。

この質問には二つの意味がこめられているように感じる。単に、きっかけをきいているのではない、と思う。「牛に曳かれて善光寺参りですよ。小田さんにくっついていたら、こうなった」

と、私は正直に打ち明けるが、質問者は、不満気である。というのも、

「お前は どうしてベ平連になったのか」

という質問のうらには、

「お前は、いかなる必然性かられてベ平連に来たか」という批判がこめられているのだ。

その人の気持を忖度すればこうもなるうか。

「お前が学生運動家だったのなら話はわかる。いや、深く世を憂う人、あるいは、思想家でも納得できる。しかし、お前は、要するに、ボルノやパロディの専門家ではないか。それがどうして、反戦運動などに加わったのか、本当は、お前は、流行に従って、ちよいと反体制的なことをやっているのにすぎないのではないか」

と、まあ、そう質問者は問いただしている。

そういわれると、自分でもそういう気がしてくる。そして、私は何となく申しわけなくなってくる。ベ平連に對してだけではなくてベトナムに對してである。

私は長い間、自分が運動家とは思えなかったし、今でもそうだ。

ベ平連ができたころ、私は無だった。

私は、前年、それまでつとめていた放送局を女からまる手記を書いたといつて誠にになって失業保険をもらっていた。

その年の四月に、私は結婚した。女房が音楽を教えるくわせてくれた。

私は毎日、どこそこに坐っている、といえは何時間でも坐っていることができた。

私は、本当に何でくついていたのだろう。それから、小田氏が予備校の先生に紹介してくれた。私をスキャンダルとして扱った週刊誌が、次に、私の手記を見こんで匿